

学校体育における用語の認識に関する一考察 —「体づくり運動」領域と「ギムナスティック」に焦点をあてて—

木村 博人*・中丸 信吾**・梁川 悦美***・山田 美絵子****

(平成 25 年 12 月 12 日査読受理日)

A Study on the Recognition of the Various Terms for Physical Education

KIMURA, Hiroto NAKAMARU, Shingo YANAGAWA, Etsumi and YAMADA, Mieko

(Accepted for publication 12 December 2013)

キーワード：体づくり運動，ギムナスティック，学校体育

Key words：Physical Development Exercise, Gymnastik, School of Physical Education

I. はじめに

平成 10 年学習指導要領の改訂が実施され，体育の内容に新しく「体づくり運動」という運動領域が設定された¹⁾²⁾．この領域はそれまで「体操」という領域であったが名称を変更し，従来の健康体力づくりとともに運動が嫌いだったり不得手の児童生徒への配慮も明確となり，すべての人が楽しく運動を実践できる能力を高めることを目的としている²⁾．

平成 10 年学習指導要領では，高学年のみの領域として取り上げられていたが，平成 20 年の改定では，すべての学年において領域として設定され¹⁾²⁾，より一層の充実が望まれている．

木村らおよび青木らは，平成 15 年に学校体育の現場で用いられている様々な用語について調査³⁾⁴⁾を実施した．

この調査は，平成 10 年学習指導要領改訂の内容を中・高校生で受けてきた学生を対象に行ったものであるが，「体づくり運動」については次のような実態が明らかになった³⁾．

- ・改訂前の「体操」領域は＝「ラジオ体操」という認識が強い．
- ・「体づくり運動」の名称変更に伴い，＝「ラジオ体操」の認識は消え，その内容として「筋力トレーニング」「ストレッチ」などが挙げられた．
- ・「体づくり運動」のねらいは健康・体力づくりに主眼が置かれつつある．
- ・「体操」「体づくり運動」などの学校体育における用語より

も，「シェイプアップ」「フィットネス」「エクササイズ」などの社会体育における用語の方が高く認識されていた．

これらの結果から，改訂の趣旨は伝わりつつあるが，完全ではなくまだ不十分なものであることが分かる．

それは，この領域が他の「水泳」や「陸上運動」などの領域のように明確な運動項目・運動種目がないため，「体づくり運動」授業の実施にあたっては教員の内容理解と展開能力の有無が大きく必要とされる⁵⁾ことが影響していると考えられる．

平成 15 年の調査から 10 年が経ち，さらに平成 20 年の学習指導要領改定後，移行期を含み 5 年が経過している．その間の「体づくり運動」領域の認識の変容については，檜皮の報告 (2013 年)⁶⁾によれば大きな変化は認められないものであった．この他教員に対する意識調査 (鷲尾 2000)⁷⁾ (岡野ら 2010)⁸⁾，体育学専攻学生に対する意識調査 (大塚 2005)⁹⁾などはあるが，平成 15 年以降の生徒・学生の意識，認識の変容についての報告は少ない．

もし，「体づくり運動」領域の内容が以前と変わらず，他の領域と比べて意識や認識が低いままであれば，教員の認識自体あるいは授業におけるアプローチの方法に問題があると考えられる．

一方，小学校学習指導要領から学校体育で扱う運動内容は「体づくり運動」「器械運動」「陸上運動」「水泳」「ボール運動」「表現運動」の領域から編成されている．また，これらの領域から「一部の領域に偏ることのないよう授業時数を配当すること」¹⁰⁾が求められている．

したがって，指導する教員はすべての運動領域について偏り無くその内容を認識している必要がある．

以上のことから，今回および前回の学習指導要領改訂で重視されている「体づくり運動」領域について小学校教員を

* 東京家政大学家政学部児童教育学科

** 順天堂大学

*** 東京家政大学家政学部児童学科

**** 国土館大学

志望している本学児童教育学科の学生がどのように認識しているか、また具体的にその運動内容をどのように捉えているかを明らかにすることは、重要であると考えられる。

II. 研究の目的

本研究の目的は、学校体育に関する様々な運動の名称に対する認識と経験の程度を明らかにすることである。

これは、今後の授業内容や展開方法の改善に対する基礎資料を得ることになる。

III. 方法

平成25年7月本学の児童教育学科1年生および2年生(5名の編入学生3年生含む)を対象に質問紙による調査を実施した。

質問紙の内容は、学校体育の現場で用いられている様々な用語について、その認識および経験の程度を調査するものである。

用語は、学習指導要領に定められている各運動領域の名称および社会体育の場面で用いられている用語を選定した。

なお、回収率は授業時間内に調査を実施したため100%である。

各調査項目を単純集計し、その後1年生と2.3年生に分けクロス集計を行った。さらにカイ二乗検定を行い有意差を判定した。

IV. 結果および考察

1. 学校体育で用いる用語

1) 「体操」について

表1は「体操」という用語に対して「聞いたことがある」か否か、「知っている」か否か、「行ったことがある」か否かについて調査対象全数の単純集計を行ったものである。

表1. 「体操」に対する認知・経験

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	142	2	5	149
%	95.3	1.3	3.4	100

	知っている	知らない	NA	合計
人数	125	3	21	149
%	83.9	2	14.1	100

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	108	24	17	149
%	72.5	16.1	11.4	100

この表の結果から多くの者(聞いたことがある95.3%、知っている83.9%、行ったことがある72.5%)が「体操」を認知、経験していることが分かる。

表2は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

カイ二乗検定を行ったが、2群間に有意な差は認められなかった。

表2. 「体操」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	57	0	1	58	NS
	%	98.3	0	1.7	100	
2年生	人数	85	2	4	91	
	%	93.4	2.2	4.4	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	49	0	9	58	NS
	%	84.5	0	15.5	100	
2年生	人数	76	3	12	91	
	%	83.5	3.3	13.2	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	42	11	5	58	NS
	%	72.4	19	8.6	100	
2年生	人数	66	13	12	91	
	%	72.5	14.3	13.2	100	

* = p<0.05
** = p<0.01
*** = p<0.001

この結果から、1年生と2.3年生の間には「体操」について認知、経験の差はないということが分かる。

具体的な経験例として多くの者(のべ42例)が「ラジオ体操」「準備体操」を挙げており、体育の授業開始時に行う準備運動としての体操を想起していることが分かる。これは、木村らの前回調査³⁾と同様の結果であった。

2) 「体づくり運動」について

表3は「体づくり運動」について「体操」と同様にその認知、経験の割合を調査対象全数に対して単純集計を行ったものである。

表3. 「体づくり運動」に対する認知・経験

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	127	21	1	149
%	85.2	14.1	0.7	100

	知っている	知らない	NA	合計
人数	92	32	25	149
%	61.7	21.5	16.8	100

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	109	30	10	149
%	73.2	20.1	6.7	100

この表の結果から、多くの者(聞いたことがある85.2%、知っている61.7%、行ったことがある73.2%)が「体づくり運動」について認知、経験していることが分かる。

表4は1年生と2.3年生に分けたクロス集計表である。

カイ二乗検定を行った結果、「聞いたことがある」か否か、「知っている」か否か、「行ったことがある」か否かのすべての項目において有意な差(p<0.001)が認められた。

また、この運動によって期待される効果を自由記述式で回答を求めたところ、1年生は「体力向上」「体力づくり」「筋力をつける」など一般的な「体力トレーニング」としてとらえていることがうかがえる。

一方、2.3年生は同様の設問に対し、1年生と同様に「体力トレーニング」と捉えている回答もあったが、これらの他に、「体をほぐす」「体の動かし方の基礎ができる」「動き

表4. 「体づくり運動」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	39	19	0	58	
	%	67.2	32.8	0	100	
2年生	人数	88	2	1	91	
	%	96.7	2.2	1.1	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	22	27	9	58	
	%	37.9	46.6	15.5	100	
2年生	人数	70	5	16	91	
	%	76.9	5.5	17.6	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	25	27	6	58	
	%	43.1	46.6	10.3	100	
2年生	人数	84	3	4	91	
	%	92.3	3.3	4.4	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

表6. 「体ほぐしの運動」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	33	24	1	58	
	%	56.9	41.4	1.7	100	
2年生	人数	81	9	1	91	
	%	89	9.9	1.1	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	22	29	7	58	
	%	37.9	50	12.1	100	
2年生	人数	68	8	15	91	
	%	74.7	8.8	16.5	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	26	26	6	58	
	%	44.8	44.8	10.4	100	
2年生	人数	72	10	9	91	
	%	79.1	11	9.9	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

がスムーズになる」などの回答が多くみられた。

これらの回答は「体づくり運動」がその領域の内容として、「体ほぐしの運動」「多様な動きをつくる運動」「体力を高める運動」で構成されている²⁾ことを理解して回答していると考えられる。

また、体づくり運動の期待される効果として「コミュニケーションが深まる」「友達と楽しむ」などの回答もみられた。これらは体づくり運動の内容である「体ほぐしの運動」のねらいの一つとして挙げられている「仲間と交流する」²⁾に対応したものと考えられる。

これらの2群間の差は、2年次に開設されている「体育運動方法(実技)」によって得られた知識、認識の差によるといえよう。

しかしながら、2.3年生間にも「期待される効果」について無回答の者も多く、内容の理解には差があることもうかがえる。

3) 「体ほぐしの運動」について

表5.は「体ほぐしの運動」についてその認知、経験の割合を調査対象全数に対して単純集計を行ったものである。

表5. 「体ほぐしの運動」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		114	33	2	149
%		76.5	22.2	1.3	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		90	37	22	149
%		60.4	24.8	14.8	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		98	36	15	149
%		65.8	24.2	10	100

この表の結果から、半数以上の者(聞いたことがある76.5%, 知っている60.4%, 行ったことがある65.8%)が「体ほぐしの運動」について認知、経験していることが分かる。

表6.は1年生と2.3年生に分けたクロス集計表である。

カイ二乗検定を行った結果、認知、経験のすべての項目において有意な差(p<0.001)が認められた。

これらの認知、経験による差は「体づくり運動」と同様に「体育運動方法(実技)」の履修・未修の差であると考えられる。

また、自由記述によって得られた期待される効果は、学年間でその内容に大差はなく、いずれの群も「柔軟性が高まる」「ケガを防止する」「筋肉がほぐれる」「体を温める」などの回答がみられた。

さらに、具体的に「どんなことをしてきたか」との設問(自由記述回答)に対して「ストレッチ」「柔軟」「ヨガ」「準備体操」などが多くみられた。これらの回答から、「体ほぐしの運動」=「柔軟運動」「準備運動(ウォーミングアップ)」と捉えていることが分かる。

「体ほぐしの運動」は心と体の関係に気づき、体の調子を整え、仲間と交流することを主なねらいとされている²⁾ことから、正確な理解をしているとは言えない。

以上のことから、「体育運動方法(実技)」の履修による認知の差が明らかとなったが、その内容の正確な理解までには至っていないことも明確となった。

4) 「多様な動きをつくる運動」について

表7.は「多様な動きをつくる運動」についてその認知、経験の割合を調査対象全数に対して単純集計を行ったものである。

表7. 「多様な動きをつくる運動」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		22	125	2	149
%		14.8	83.9	1.3	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		19	101	29	149
%		12.8	67.8	19.4	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		15	115	19	149
%		10.1	77.2	12.7	100

この表から約7割の者(聞いたことがない83.9%, 知らない67.8%, 行ったことがない77.2%)は認知経験がないと回答していることがわかる。

「多様な動きをつくる運動」は平成20年の改訂時に、低・中学年に「体づくり運動」を構成する内容として「体ほぐしの運動」とともに示されたものである。大学1, 2年生は改訂当時中学3年から高校1年生であり, 小学生の時は「基本の運動」²⁾という領域名称で受講しているため, 低い認知, 経験値になったと考えられる。

表8.は1年生と2.3年生に分けたクロス集計表である。

表8. 「多様な動きをつくる運動」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	5	52	1	58	NS
	%	8.6	89.7	1.7	100	
2年生	人数	17	73	1	91	
	%	18.7	80.2	1.1	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	2	48	8	58	**
	%	3.4	82.8	13.8	100	
2年生	人数	17	53	21	91	
	%	18.7	58.2	23.1	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	4	48	6	58	NS
	%	6.9	82.8	10.3	100	
2年生	人数	11	67	13	91	
	%	12.1	73.6	14.3	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

カイ二乗検定を行った結果, 認知, 経験の「知っている」か否かの項目のみ有意な差 (p<0.01) が認められた。

また, 具体的に「どんなことをしてきたか」との設問(自由記述回答)に対して「反復横とび」「ダンス」「バレーボール」など全く統一感のない回答が挙げられた。

以上のことから, 「多様な動きをつくる運動」の領域について学生は認識, 理解が不足していることがわかる。

今後の授業においてこの領域の理解は重要な課題であるといえる。

5) 「体力を高める運動」について

表9.は「体力を高める運動」についてその認知経験の割合を調査対象全数に対して単純集計を行ったものである。

表9. 「体力を高める運動」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		88	58	3	149
%		59.1	38.9	2	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		72	48	29	149
%		48.3	32.2	19.5	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		75	59	15	149
%		50.3	39.6	10.1	100

この表から約半数(聞いたことがある59.1%, 知っている48.3%, 行ったことがある50.3%)の者に認知, 経験があることがわかる。

表10.は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表10. 「体力を高める運動」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	32	25	1	58	NS
	%	55.2	43.1	1.7	100	
2年生	人数	56	33	2	91	
	%	61.5	36.3	2.2	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	26	24	8	58	NS
	%	44.8	41.4	13.8	100	
2年生	人数	46	24	21	91	
	%	50.5	26.4	23.1	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	26	27	5	58	NS
	%	44.8	46.6	8.6	100	
2年生	人数	49	32	10	91	
	%	53.8	35.2	11	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

カイ二乗検定を行ったが, 2群間に有意な差は認められなかった。

「体力を高める運動」は平成10年の改定時より高学年の「体づくり運動」の内容として「体ほぐし運動」とともに示されている¹⁾²⁾。この構成は中学生, 高校生にも継続されている。

また, 自由記述によって得られた具体的な運動内容の多くは「持久走」「マラソン」「筋トレ」「体力トレーニング」などであった。

6) その他の運動領域について

表11.は「器械運動」の認知経験について調査対象全数の単純集計を, 表12.は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表11. 「器械運動」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		146	1	2	149
%		98	0.7	1.3	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		116	6	27	149
%		77.9	4	18.1	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		125	16	8	149
%		83.9	10.7	5.4	100

表 12. 「器械運動」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	58	0	0	58	NS
	%	100	0	0	100	
2年生	人数	88	1	2	91	
	%	96.7	1.1	2.2	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	45	4	9	58	NS
	%	77.6	6.9	15.5	100	
2年生	人数	71	2	18	91	
	%	78	2.2	19.8	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	51	6	1	58	NS
	%	87.9	10.4	1.7	100	
2年生	人数	74	10	7	91	
	%	81.3	11	7.7	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある98.0%，知っている77.9%，行ったことがある83.9%）が認知，経験しており，学年間の有意な差も認められなかった。

表 13. は「陸上競技」の認知経験について調査対象全数の単純集計を，表 14. は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 13. 「陸上競技」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		148	0	1	149
%		99.3	0	0.7	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		120	0	29	149
%		80.5	0	19.5	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		140	3	6	149
%		94	2	4	100

表 14. 「陸上競技」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	58	0	0	58	NS
	%	100	0	0	100	
2年生	人数	90	0	1	91	
	%	98.9	0	1.1	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	49	0	9	58	NS
	%	84.5	0	15.5	100	
2年生	人数	71	0	20	91	
	%	78	0	22	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	57	1	0	58	NS
	%	98.3	1.7	0	100	
2年生	人数	83	2	6	91	
	%	91.2	2.2	6.6	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある99.3%，知っている80.5%，行ったことがある94.0%）が認知，経験しており，学年間の有意な差も認められなかった。

表 15. は「水泳」の認知経験について調査対象全数の単純集計を，表 16. は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 15. 「水泳」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		149	0	0	149
%		100	0	0	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		129	0	20	149
%		86.6	0	13.4	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		146	0	3	149
%		98	0	2	100

表 16. 「水泳」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	58	0	0	58	NS
	%	100	0	0	100	
2年生	人数	91	0	0	91	
	%	100	0	0	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	51	0	7	58	NS
	%	87.9	0	12.1	100	
2年生	人数	78	0	13	91	
	%	85.7	0	14.3	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	57	0	1	58	NS
	%	98.3	0	1.7	100	
2年生	人数	89	0	2	91	
	%	97.8	0	2.2	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある100.0%，知っている86.6%，行ったことがある98.0%）が認知，経験しており，学年間の有意な差も認められなかった。

表 17. は「ダンス」の認知経験について調査対象全数の単純集計を，表 18. は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 17. 「ダンス」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数		147	1	1	149
%		98.6	0.7	0.7	100

		知っている	知らない	NA	合計
人数		128	1	20	149
%		85.9	0.7	13.4	100

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数		139	6	4	149
%		93.3	4	2.7	100

表 18. 「水泳」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	57	1	0	58	NS
	%	98.3	1.7	0	100	
2年生	人数	90	0	1	91	
	%	98.9	0	1.1	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	50	0	8	58	NS
	%	86.2	0	13.8	100	
2年生	人数	78	1	12	91	
	%	85.7	1.1	13.2	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	55	3	0	58	NS
	%	94.8	5.2	0	100	
2年生	人数	84	3	4	91	
	%	92.3	3.3	4.4	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある98.6%，知っている85.9%，行ったことがある93.3%）が認知，経験しており，学年間の有意な差も認められなかった。

表 19. は「球技」の認知経験について調査対象全数の単純集計を，表 20. は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 19. 「球技」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	149	0	0	149	
%	100	0	0	100	

		知っている	知らない	NA	合計
人数	122	0	27	149	
%	81.9	0	18.1	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	140	0	9	149	
%	94	0	6	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

表 20. 「球技」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	58	0	0	58	NS
	%	100	0	0	100	
2年生	人数	91	0	0	91	
	%	100	0	0	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	49	0	9	58	NS
	%	84.5	0	15.5	100	
2年生	人数	73	0	18	91	
	%	80.2	0	19.8	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	55	0	3	58	NS
	%	94.8	0	5.2	100	
2年生	人数	85	0	6	91	
	%	93.4	0	6.6	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある100.0%，知っている81.9%，行ったことがある94.0%）が認知，経験しており，学年間の有意な差も認められなかった。

表 21. は「武道」の認知経験について調査対象全数の単純集計を，表 22. は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 21. 「武道」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	139	10	0	149	
%	93.3	6.7	0	100	

		知っている	知らない	NA	合計
人数	111	11	27	149	
%	74.5	7.4	18.1	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	71	76	2	149	
%	47.7	51	1.3	100	

表 22. 「武道」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	54	4	0	58	NS
	%	93.1	6.9	0	100	
2年生	人数	85	6	0	91	
	%	93.4	6.6	0	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	42	6	10	58	NS
	%	72.4	10.4	17.2	100	
2年生	人数	69	5	17	91	
	%	75.8	5.5	18.7	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	23	34	1	58	NS
	%	39.7	58.6	1.7	100	
2年生	人数	48	42	1	91	
	%	52.7	46.2	1.1	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある93.3%，知っている74.5%）が認知していたが，経験は半数以下（行ったことがある47.7%）であった。学年間の有意な差は全ての項目で認められなかった。

以上のことから，学校体育で用いられる用語で，特に学習指導要領の運動領域「体づくり運動」は他の運動領域より認識が低く，具体的な運動内容を的確に挙げるのが困難であることが明らかとなった。

2. 社会体育の場面で用いる用語

1) 「フィットネス」「シェイプアップ」「エクササイズ」について

表 23. は「フィットネス」の認知経験について調査対象全数の単純集計を，表 24. は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 23. 「フィットネス」に対する認知・経験

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	117	31	1	149	
%	78.5	20.8	0.7	100	

		知っている	知らない	NA	合計
人数	59	69	21	149	
%	39.6	46.3	14.1	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	21	116	12	149	
%	14.1	77.9	8	100	

表 24.「フィットネス」に対する認知・経験の学年比較

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
人数	45	13	0	58	NS
%	77.6	22.4	0	100	
人数	72	18	1	91	
%	79.1	19.8	1.1	100	

	知っている	知らない	NA	合計	有意水準
人数	20	30	8	58	NS
%	34.5	51.7	13.8	100	
人数	39	39	13	91	
%	42.9	42.9	14.2	100	

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
人数	6	48	4	58	NS
%	10.3	82.8	6.9	100	
人数	15	68	8	91	
%	16.5	74.7	8.8	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

78.5%のものが「聞いたことがある」と回答したが、「知っている」74.5%、「行ったことがある」14.1%と低い値を示しており、言葉としては認知しているが実際の内容や体験は乏しいことがわかる。

学年間の有意な差は全ての項目で認められなかった。

表 25.「シェイプアップ」の認知経験について調査対象全数の単純集計を、表 26.は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 25.「シェイプアップ」に対する認知・経験

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	143	6	0	149
%	96	4	0	100

	知っている	知らない	NA	合計
人数	115	11	23	149
%	77.2	7.4	15.4	100

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	88	55	6	149
%	59.1	36.9	4	100

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

表 26.「フィットネス」に対する認知・経験の学年比較

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数 57	1	0	58	NS
	% 98.3	1.7	0	100	
2年生	人数 86	5	0	91	
	% 94.5	5.5	0	100	

	知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数 45	5	8	58	NS
	% 77.6	8.6	13.8	100	
2年生	人数 70	6	15	91	
	% 76.9	6.6	16.5	100	

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数 29	26	3	58	NS
	% 50	44.8	5.2	100	
2年生	人数 59	29	3	91	
	% 64.8	31.9	3.3	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある96.0%、知っている77.2%）が認識しており半数以上の者（行ったことがある59.1%）が経験していることがわかる。

学年間の有意な差は全ての項目で認められなかった。

表 27.は「エクササイズ」の認知経験について調査対象全数の単純集計を、表 28.は1年生と2.3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表 27.「エクササイズ」に対する認知・経験

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	141	7	1	149
%	94.6	4.7	0.7	100

	知っている	知らない	NA	合計
人数	115	11	23	149
%	77.2	7.4	15.4	100

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	72	70	7	149
%	48.3	47	4.7	100

表 28.「エクササイズ」に対する認知・経験の学年比較

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数 54	3	1	58	NS
	% 93.1	5.2	1.7	100	
2年生	人数 86	4	0	90	
	% 94.5	4.4	0	98.9	

	知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数 43	5	10	58	NS
	% 74.1	8.6	17.3	100	
2年生	人数 72	6	13	91	
	% 79.1	6.6	14.3	100	

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数 21	34	3	58	NS
	% 36.2	58.6	5.2	100	
2年生	人数 51	36	4	91	
	% 56	39.6	4.4	100	

* = p<0.05
 ** = p<0.01
 *** = p<0.001

非常に多くのもの（聞いたことがある94.6%、知っている77.2%）が認識しており半数近くの者（行ったことがある48.3%）が経験していることがわかる。

学年間の有意な差は全ての項目で認められなかった。

以上の結果から、前回調査³⁾と同様に社会体育で用いられている用語の認知度は高いことが明らかとなった。ただし、経験値は認識より低く、情報としては認識しているものの実際の運動にはつながっていない様子が見えそうである。

2)「ギムナスティック」について

表 29.は「ギムナスティック」の認知経験について調査対象全数の単純集計を行ったものである。

表 29.「ギムナスティック」運動に対する認知・経験

	聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計
人数	56	89	4	149
%	37.6	59.7	2.7	100

	知っている	知らない	NA	合計
人数	38	88	23	149
%	25.5	59.1	15.4	100

	行ったことがある	行ったことがない	NA	合計
人数	25	107	17	149
%	16.8	71.8	11.4	100

この表から「ギムナスティック」に対する認知経験は4割にも届かず(聞いたことがある36.7%, 知っている25.5%, 行ったことがある16.8%)非常に低いといえる。

表30.は1年生と2,3年生の2群に分けクロス集計を行ったものである。

表30. 「ギムナスティック」に対する認知・経験の学年比較

		聞いたことがある	聞いたことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	7	49	2	58	***
	%	12.1	84.5	3.4	100	
2年生	人数	49	40	2	91	
	%	53.8	44	2.2	100	

		知っている	知らない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	6	44	8	58	***
	%	10.3	75.9	13.8	100	
2年生	人数	32	44	15	91	
	%	35.2	48.4	16.4	100	

		行ったことがある	行ったことがない	NA	合計	有意水準
1年生	人数	5	49	4	58	*
	%	8.6	84.5	6.9	100	
2年生	人数	20	58	13	91	
	%	22	63.7	14.3	100	

* = p<0.05
** = p<0.01
*** = p<0.001

カイ二乗検定を行った結果, 認知, 経験のすべての項目において有意な差 ($p<0.001\sim p<0.05$) が認められた。

この結果から2,3年生は「ギムナスティック」に対して1年生より認知経験の度合いが有意に高いことが分かる。これは, 2年次開設の「体育運動方法(実技)」における学習の差であるといえる。

しかしながら, 「どんな運動を行ったか」という自由記述形式の設問には1年生も2,3年生もほとんど回答がみられず, 具体的な運動内容まで把握していないと考えられる。

さらに, 2,3年生の認知経験も決して高い値ではなく(表30.「聞いたことがある」53.8%, 「知っている」35.2%, 「行ったことがある」22.0%), 今後より多くの者に授業内容の浸透を図るべく授業展開の工夫を必要と考える。

「ギムナスティック」は, 体操, 体操競技, 器械体操などと訳される英語表記の「Gymnastics」よりも非常に広義に捉えるもので, ドイツ語表記の「Gymnastik」で表されるものである¹¹⁾。

「ギムナスティック」とは, 体づくりと動きづくりを目的としており「健康」「表現」「競技力向上」の領域の中での生活の質的向上をねらいとした運動の総称である。その運動内容は器具を用いない運動(歩く, 這う, 走る, 跳躍, 運ぶ, 伸展運動, 筋力トレーニングなど)や器具を用いた運動(メディシンボール, 長椅子, 肋木, ミニトランポリン, 棒, ロープなど), リズム運動(ダンスなど)が挙げられる。また, その対象者は学校体育・社会体育も含み, あらゆる対象年齢に応じた運動が存在する¹¹⁾¹²⁾。

一方, 「体づくり運動」の内容は低・中学年において「体ほぐしの運動」と「多様な動きをつくる運動(遊び)」で構成

されており, 「多様な動きをつくる運動(遊び)」には従前(平成10年改定時)の「基本の運動」の内容であった「力試しの運動(遊び)」「用具を操作する運動(遊び)」を含むものとして示されている¹⁾²⁾。

また, これまでと同様に高学年においては「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」で構成されている。

「体ほぐしの運動」は心と体の関係に気づき, 体の調子を整え, 仲間と交流することが主なねらいであり, 「多様な動きをつくる運動(遊び)」は他の領域において扱われにくい様々な運動につながる基本的な動きを培うことが主なねらいである²⁾。

また, 「体力を高める運動」は体の柔らかさ, 巧みな動き, 力強い動き, 動きを持続する能力を高めることが主なねらいとされている²⁾。

以上のように双方のねらいや運動内容の構成などをみると, 「体づくり運動」は「ギムナスティック」のねらいや構成を基にしていると考えられる。

また, 「Gymnastik」は江戸時代末期から明治時代にかけて日本に移入され, 現在も「体操」と訳されている¹¹⁾¹³⁾が, 学習指導要領においても平成10年改訂時に「体づくり運動」となった領域名称もそれ以前は「体操」であった。これは, そのねらいや運動内容を「Gymnastik」を基にしたからに違いなからう。

さらに, 改訂にあたっては, 本調査および前回調査³⁾でも明らかなように「体操」=ラジオ体操のイメージが強く, 領域の内容やねらいが異なった形で波及することを是正する意味があったのではないかと考える。

以上のことから, 「体育運動方法(実技)」の授業は「ギムナスティック」の具体的な身体運動例を「体づくり運動」の各内容に照合させて, 学習することが効果的であると考えられる。

もともと「体づくり運動」の領域は特定の運動様式が存在するわけではないため, 教員の教材研究や授業展開の工夫が必要である⁵⁾。体育やスポーツを専門分野としていない本学科の学生にとっては, 日常的に運動に対する情報や経験を多くは取得できないので, 「ギムナスティック」を「体づくり運動」の展開例として学ぶことは重要であると考えられる。

V.まとめ

本学児童教育学科の1, 2年生を対象に, 学校体育の現場で用いられる様々な用語についてその認識および経験の程度を調査した結果, 以下のことが明らかとなった。

1. 「体づくり運動」領域の認知度は, 学習指導要領に挙げられている他の運動領域の認知度に比べて極めて低いものであり, 平成15年調査時と変わらないものであった。

2. 「体づくり運動」領域およびその内容である「体ほぐしの運動」「多様な動きをつくる運動」の認知および経験の程度は1年生と2年生の間に有意な差が認められた。
3. この差は2年次開設「体育運動方法(実技)」の学習効果であるといえる。
4. しかしながら、その学習効果はまだ乏しく、更なる授業展開の方法を検討する必要性がみられた。
5. 学習効果をさらに広めるためには、「体づくり運動」を構成するもととなった「ギムナスティック」の運動内容を具体例として実施することが示唆された。

具体的には、実技授業においては「体づくり運動」領域の単元に対応した内容であることをまず意識付けるとともに、実際の運動例を実践し、具体例としてノートに記録する一連の経過をとり、現場実践できる能力を育てたい。

講義科目においては、今回の調査結果をもとに、生徒を指導する立場の教員はすべての運動領域について偏り無く認識することの必要性があることを意識づけたい。

引用および参考文献

- 1) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説 体育編 平成20年8月, 2版, 東洋館出版(東京), pp.5-8, 2009
- 2) 文部科学省, 学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動 一授業の考え方と進め方一(改訂版), 初版, 東洋館出版(東京), pp.6-19, 2013
- 3) 木村博人, 青木和浩, 「ギムナスティック」における様々な運動の名称に関する検討—女子大学生を対象とした調査より—, 東京家政大学研究紀要, 44(1), pp.23-28, 2004
- 4) 青木和浩, 飯塚浩史, 須田柳治, 高等学校における「体づくり運動」に関する一考察, 体操研究, 1, pp1-8, 2003
- 5) 須田柳治, 青木和浩, 「体づくり運動」—授業用参考資料—, 順天堂大学スポーツ健康科学部コーディネーション運動研究室, (千葉), pp.1-7, 2005
- 6) 檜皮貴子, 大学生における「体づくり運動」の実施経験と意識調査: 駿河台大学の学生を対象として, 駿河台大学論叢, 46, pp.97-111, 2013
- 7) 鷲野昭久, 「体づくり運動」領域「体ほぐしの運動」についての教師の意識調査, 日本体育学会大会号, 51, p494, 2000
- 8) 岡野昇, 伊藤暢浩, 山本俊彦, 加納岳拓, 小学校教師における「体力を高める運動」に関する意識調査, 三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 30, pp.83-88, 2010
- 9) 大塚隆, 「体づくり運動」の教材研究—「体ほぐしの運動」と「体力を高める運動」に関する意識調査—, 東海大学紀要, 体育学部34, pp.15-24, 2005
- 10) 文部科学省, 小学校学習指導要領解説 体育編 平成20年8月, 2版, 東洋館出版(東京), p86, 2009
- 11) 須田柳治, 太田雅夫, GYMNASSTIK ギムナスティックを知るために, 順天堂大学義務ナスティック研究室, (千葉), pp.6-31, 1994
- 12) 須田柳治, 太田雅夫, Gymnastic のとらえ方に関する研究, 順天堂大学保健体育紀要, 29, pp.46-55, 1986
- 13) 太田雅夫, 渡辺直吉, 須田柳治, Gymnastik の史的変遷に関する研究序説, 法政大学体育研究センター紀要, 7, pp.21-33, 1989

Abstract

The following things became clear as a result of investigating the level of recognition and experience with various terms about physical education.

1. The experience and cognition on the area of Physical Development Exercise was very low. It was not so changeful as the investigation in 2003.
2. Significant differences were found between first and second graders of experience and cognition in the area of Physical Development Exercise, Exercise for Awareness, Coordination, Communication, and Essential Motions Leading to Various Movements.
3. This difference is a learning effect of Exercise Method' Physical Education.
4. However, this learning effect is still poor, and teaching methods need to be examined.
5. In order to further spread the learning effect, it is suggested to carry out the contents of Gymnastik.